【短信】

言葉

小林　達矢

教職三年目。力も経験もなく、逃げ出したいと思う時がある。そんな私を支えてくれる言葉が学校にはある。

昨年、長野市立北部中学校に赴任し三学年副担任として、多くは進路指導、学習指導に携わった。多くの雑務、研究授業が重なり精神的にも身体的にもしんどい時があった。生徒に心配される日々が嬉しくも情けなく、つらかった。そんな私に学級担任の先生がかけてくれた言葉が忘れられない。

「馬鹿は馬鹿らしくに頑張れ」

初めは、いらっときた言葉だが、新規採用で張り切り、力があると過信し、どこか背伸びをしていた自分に気付いた。自分らしくやってみよう、自分は馬鹿だから努力し続けようと気持ちを新たにすることができた。今も行き詰まった時、この言葉をたよりに馬鹿らしく頑張っている。

今年は、初めて担任としてクラスを任せていただいた。三十三人のいずれも異なる個性が輝いて、苦労は多いが、毎日が楽しく初めてやりがいというものを感じている。この中に、これまで普通学級で生活できなかった生徒がいる。中学生になり、一日も休まずクラスで頑張り、できないことが少しずつできるようになってきている生徒だが、二週間前の一学期終業式の後にそろーっと来て話をしてくれた。

「お前のおかげで学校行けるようになったわ」

口の利き方は置いておいて、まず話しかけてきてくれたこと、そのように思ってくれていることに驚いた。決して私だけのおかげで学校に行けるようになったと思っていないが、一人の生徒の人生に少しでも関われていることを実感し、非常に嬉しく感じた。また二学期も頑張ろうと活力をくれた言葉だった。

私を支えてくれる言葉は他にも多くあるが、私が発する言葉は周囲の方へ、どのように影響を与えているのだろうか。研究授業の時だけ、口調が優しくなるねと言われたり、口癖を真似たりと生徒は私の言葉をよく聞いてくれている。交わす言葉を大切にし、言葉を発する自分自身を磨いていきたい。

（こばやし　たつや　長野市立北部中学校）